

国 際 健 康 開 発 *I H D*

— 特定非営利活動法人(NPO)会報 1 号 — 2008年10月 —

NPO 国際健康開発の設立とその後の活動を振り返って

設立を思い立った訳は

NPO 設立の構想は、私が勤務していた東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻発達医科学分野の時に始まりました。国際保健学専攻は名前が示すように国際保健に関する研究を様々な手法を用いて行うことであります。この教室には、国内の大学院生、学生、研究生などとともに海外特にアジアからの方々がおります。さらに海外には共同研究者がおります。私が勤務していた時は、子どもの感染症、母子保健が研究の中心でした。

これらの研究者が数年の短期間の付き合いにとどまらず長期間わたって相互に交流し、その結果がその国あるいは周りの国々の健康に貢献することを願って設立を考えました。もちろんこのようなことは国のレベルでのやり方もあるのですが、今社会で多くのNPOがあるように小規模でも迅速に行動する道を作りたいと思いました。例えば、突然の災害時に感染症が流行いたします。その時の診断に迅速診断薬を使って感染の拡大を防ぐことができればと思います。また大学院生等の研究者の海外での活動の支援、海外の研究者の招へいも含まれます。

長年の研究生生活の中で、色々な方々にお世話になってきました。研究者はもちろんの事、診断薬、治療薬、健康食品会社の方々との知り合いもできました。その中で幸いにもいくつか市販に至った物もあります。これらの方々の後押しも設立のきっかけになりました。

設立までの道のり

2007年3月に東京大学を退職する際、NPOの設立を考えていると挨拶しました。その後から漠然と思っていたNPOの設立のための行動が始まりました。まずは書籍、インターネットを利用した検索から始まり、それでは理解できない場合、東京都の法人課に電話したり、訪問したりしました。結局、東京都の発行しているガイドブックあるいはホームページでいただければ良いのかもしれませんが、もともと収入

大きく参考になりました。8月に申請書を作成し、東京都に提出しました。この道の専門家に申請書を作っ

てあまり見込めないNPOとしてはお願いすること自体が金銭的な負担と考えました。幸いにも12月に殆どの修正もなく認められ、法務局に法人としての登録を終え、12月末に東京都から承認の書類をいただきました。

定款に書いた目的

定款の中には次のように書いております。

「この法人は、病原感染源を簡易・迅速に検査し診断するためのキットを開発し、その成果物を、海外諸国の政府、団体、医師、研究者等は無償で、あるいはその国の経済水準に見合う低価格で提供し、また、必要に応じて海外諸国からの留学生や研究者の招聘、海外活動支援および海外諸国への研究者派遣を支援することによって、病原体感染に対する予防法及び治療法の開発に貢献することを目的とする。」

しかしながら本人が真面目に研究を行っており、実りが期待できるようであれば少額であっても感染症の研究の有無にかかわらず援助したいと思っております。

正会員と賛助会員・賛助団体

いままでの研究者仲間の学会と異なって、身近な人に手伝ってもらうことにしました。東京大学から一緒に新天地にきた2人（とその家族）、昔からの研究の仲間、身内の者が理事となりました。最初のうちは、身動きが迅速にできるように少人数となっております。また、一部の研究者には賛助会員になっていただきました。

設立から2008年3月まで

2007年度の収入として寄付金と正会員、賛助会員からの会費が入りました。また支出としてベトナムでの研究援助、卒業する大学院生の研究の報告会、ノロウイルス迅速診断キットの無料提供、海外からの留

学生の国内交通費援助などに使用しました。期間が短かったので小規模の支出で終わりました。

2008年4月以降

4月から10月まではいくつかの活動を行いました。日常のことで忙殺されているという感じで、それ以上は出来ておりません。今年度の収入の徴収はこれから呼びかけの予定です。支出としては6月の日中国際ウイルス学会に中国から研究者の招へい、大学院生のスリランカでの調査のための渡航費負担、夏季の留学生との交流会があります。また、ベトナムへノロウイルスの診断キットを送りました。

今後の予定

現時点ではNPO国際健康開発として少しの活動しかしていない、あるいは身近なことでの支援にとどまっているのが現状です。しかしそれなり現実的な支援にはなっていると思っております。今年度はこのような状況が続くのではと思っております。今後の活動の基盤を強くするためには、①固定した収入が活動計画に見合っただけで毎年あること。②NPOの実際の活動を支えてくれる方がそれぞれの担当でいること、③将来に向けたビジョンとその準備などと思っております。皆様の支援と協力を得るために活動を広く認知戴くことも必要と思っております。この会報もその目的を含めて作りました。よろしくお願いします。

(牛島廣治)

日本語教師を始めて

牛島理事とは東大教養学部時代の同級生ですが、医学部と薬学部に進路を分かって以来、お会いしたのは40年ぶり、昨年5月の同窓会でのことでした。私はその年の2月に製薬会社を定年退職して気儘な暮らしをしていましたが、先生は未だ意気盛んで、東大を退官された後、渋谷に研究室を持つと伺い、飲み仲間でお祝い会をしたりお付き合い頂いていたのが、NPOを手伝うようになった切っ掛けです。今年の6月からは留学生の日本語教師役の打診を受け、思い切って引き受けることにしました。生徒は6人、貴重な研究時間を毎週火曜に1時間割いて貰って教えるのは重責でしたが、素人の恐ろしさ、日本語を上達するには自分の言いたい事を話すのが一番と、まず皆に自己紹介を

英語で書いてメールで送って貰い、それを私が日本語に直してスピーチして貰うというのをやりました。無謀な試みで流暢にはいきませんでした。それぞれの思いや経歴が分かり、とても有意義でした。その内に、次は自国紹介をやりましょうという声が留学生から起こり、そのシリーズを暫くやりました。タイ、ベトナム、ラオスなどですが、色んな遺跡やお祭の話など出てきて、どこの国も楽しく生きているのが分かりとても親しみが持てました。日本語クラスは現在はテキストを使って地道に勉強していますが、自己紹介、自国紹介については是非、次報以降に掲載頂けたらと思います。(玉木太郎)

9年目の秋、そして再びのスタート

東大国際保健学専攻発達医学教室の事務募集を見て応募したのが1999年秋でした。一時期、損害保険会社に勤務したことはありましたが、大学、研究室の世界とは全く無縁の主婦が何とか仕事を続けられているのは、牛島先生のご理解とご指導のおかげと思っております。

教室では日本の学生さんだけではなく、アジアの様々な国の留学生が真剣に研究されている姿に感動いたしました。また、留学生はみんな、今の日本人が忘れてしまった真面目さ、奥ゆかしさ、家族愛に満ちた方々で、9年間の出合いは私の宝物となっています。卒業されてからは、それぞれの国でご活躍されていることと思っております。

昨年、先生の退職後の新しい研究室へ引き続き来させていただくことになりました。牛島先生、沖津先生と一緒に国際保健の研究、発展に少しでもお手伝い出来ればと思っております。(佐藤京子)

会員募集

賛助会員(個人)一口2千円(1口以上)、賛助会員(団体)一口3万円(一口以上)、郵便振替口座については、牛島宛(ushijima-hiroshi@jcom.home.ne.jp; Fax03-3486-8481)に賛助会員希望としてご連絡いただくと御住所に振り込み用紙をお送りします。個人会員は活動を勇気づけるので金額にかかわらずお願い致します。